被災体験と知恵 共有

岡山市内でフォーラム

南海トラフ地震に備え、自治体の対策や東日本大震災の被災地商店街の経験・知恵を共有するフォーラム（国際医療NGO「AMDA（アムダ）」主催）が1日、岡山市北区の岡山国際交流センターであった。

冒頭、AMDAスタッフとして東日本大震災後に支援活動をした大政朋子さんが「物資の偏りなど避難所で支援の格差があった。南海トラフでは東日本大震災の避難所経験者に、避難所コーディネーターとして参加してほしい」と話した。

被災地の六つの商店街からも体験談が出た。岩手県陸前高田市の「高田大隅つどいの丘商店街」の太田明成事務局長は「仮設住宅に移る際、『一刻も早く』という思いが皆にあり、コミュニティーが分裂した。行政はコミュニティーが復活できるマニュアルづくりをして欲しい」と提言。高知県須崎市の担当者は「地域、学校、医療機関が連携した応急救護訓練もやって備えている。命をつなぐ取り組みが重要」と発表。徳島県美波町の担当者も「震災前から復興を含めたまちの将来像を共有し、復興対策や地域の持続活性化策に取り組むための計画を策定している」とした。

フリーセッションに参加した総社市の片岡聡一市長は「災害はリーダー次第。いざと言う時、リーダーがどう行動できるか。助けてもらうこともリーダーの資質だと思った」と話した。（大坂尚子）

東日本大震災の復興の歩みを語る商店街の代表者＝岡山市北区奉還町2丁目